

# 本願寺史料研究所報

28号

発行所	本願寺史料研究所
〒六〇〇一八二六八	京都市下京区七条大宮上ル 龍谷大学大宮学舎図書館内
電話	〇七五一三四三一三三一一
発行者	所長 千葉乗隆
発行日	二〇〇三年三月三〇日
	内線(五四一八)

## 門主の茶

—宇治茶師上林道庵との関係を中心にして—

坂本博司

な立場にあつたが、彼ら宇治茶師は諸家に對して、特産品である碾茶が確實に振り分けられる窓口として、十全に役割を果たせばよいのであつて、必ずしも茶業の詳細に通じてなくともよかつたのである。茶の生産者や問屋は、一般の宇治郷民らを中心に構成されるのであつて、宇治茶師はその名目こそが重宝される、そんな存在であったと言つても過言ではない。茶師と先様との関係は、今日の生産者と消費者といった関係にはおきかえられないものである。

上林道庵がある公家に納めた茶壷の目録「御茶入日記」と、つづけさまに本願寺の記録に道庵と茶壷に關わる記事が散見することを教えられた。時期はともに十七世紀の後半、宇治の茶がどのようにして発注者のもとに渡るのか、これらはほとんど史料的裏づけのない空白部分にあてはまるものだつた。本稿では、今回知りえた史料を出典ごとに年代順に配列し、末尾に紹介した。IとIII、IV、Vの四点が本願寺史料研究所保管の本願寺の文書で、II成を乞う上申書が目立つ。たしかに、宇治茶業に不可欠

が右の「御茶入日記」(個人蔵)である。碾茶づくりと製品の管理に関する基本的かつ常識的な判断をまじえながら、これらの記事を分析しようと思う。

多くの茶師の中で、とりわけ上林道庵が本願寺と深く通じるようになつた経緯は不明である。でも、少なくとも近世初頭から関係の部署には顔の知れた存在であつて、居住地の宇治郷に末寺園林寺を開き、本願寺との関係においてその立場を確固たるものにしたことはたしかである。園林寺の園は茶畠を意味し(V)、いかにも茶どころ宇治にふさわしい寺名となつてゐる。その建立年と伝える寛永十八年(III)は、江戸幕府御用茶師が独自の態勢を固める時期と符合する。おそらくこの頃に道庵家は、時の地域社会のリーダーでもあつた上林一統に追随するかたちで、旧来から通称とした北村姓を廃したものと思われる。由緒書のなかには、先祖北村主計倅道悦が、上林久重の長女を娶つたことから上林姓を名乗つたとするものもある。ちなみに、これと類する事例として、上林三入家があげられる。寛永十五年頃に初代が隠居し、二代目からはそれまで併用された藤村という苗字を用いなくなつてゐる。

ここで主として登場する道庵は家伝に言う四代目である。たぶんその先代からすでに上林姓であつたと思われる。年始の挨拶におとずれた記事にまずその名が見える(I-1①)。同道した者のなかで藤岡はあまり目にしない名だが、野間、堀はいずれも茶師である。円柿は干柿で、

ご承知のとおり南山城の名物である。次もまた付け届けの記事で、四月半ば過ぎに「聞茶」二種と鱈一本を携えたとある(I-1②)。当時の書状などにも、この時期に「聞茶」を贈られた礼を述べるものがあつて、重きを置く出先には恒例だつたことがわかる。おそらく、試飲用の茶なのだろう。ちょうど新茶の季節であつて、一通りの製茶工程を経たいわゆる荒茶には事欠かないが、今日の仕立て方のいわゆる青製の煎茶は、まだ当時は開発されていないはずだから、やはり宇治らしくお抹茶の原料となる碾茶とすべきなのだろうか。ただ、碾茶の新茶は、臼で挽いて抹茶にするとあまりに青臭く、飲用に最適とはいえず、それが試飲用としてもたらされたとは考えにくい。はたしてどのような茶が持つていかれて、どういううかたちで供されたのか、これだけではわからない。

そのおよそ一月後、「御茶詰」に本願寺から職員が宇治へ派遣されている(I-1③)。文字通りの「御茶詰」というと、荒茶を精選し、少し加熱して、選りすぐられた細かい葉片を十匁ずつ「半袋」と呼ばれる袋に入れ、そして茶壺に定量を納める作業のはずである。しかし六月末、まだ夏まつさかりの頃にこの作業はしない。ありえないと言つてよい。おそらく、この場合は「御茶詰」という名目での宇治への招待、本願寺からすると表敬訪問だったのではないかろうか。まずこの時期に茶を詰めるという実際の作業はなかつたはずだから、右のように判断することがもつとも適當と思われる。

さらに一月後、今度も進物持参の記事である（I—④）。

「夏切壺」も、常連の顧客にはこれまた恒例の品であつた。冬の口切に対し、それまでの間に用いられるものようで、この場合は通常の飲用つまり葉茶（碾茶）が茶臼でもつて抹茶にされた雰囲気が強い。ただし、これも前年からの保留分つまり古茶、いわゆる「ひね」に新茶を合わせたものが用いられたはずである。

ここでいってん本願寺の史料を離れて、壺に納められた茶の目録である御茶入日記（以下、入日記と略）の事例をみるとしよう。入日記は、箱の蓋の内側に添付されるので、自ずとその大きさは限られる。たいてい縦十数cmで、やや横長である。紙質は普通の文書に用いられるものよりも厚手で、とくに上質にこだわったという形跡はないが、いわゆる奉書紙である。その書式はほぼ画一的で、まず壺の銘あるいは注文主の代表者名や番号が行頭に記入され、つづいて改行され、中揃えのように「御茶入日記」とくる。これがいわば表題である。

茶の目録部分は、多くは二系統の一つ書きに分かれる。一つは「極上」とあり、この下につづけて「半」いくつ、つまり十匁つまり三十七・五gの「葉茶」が入るとされる袋茶の数量の合計が記される。半袋にはつづく小さな文字の数行がその内訳で、摘採日を記す茶銘は初昔や後昔といった銘のもので、そのあとに各茶師それが使用する茶銘（袋茶銘・参考）がいくつか列記され、それじめに「半」いくつと記された数と一致する。これが壺

の中のいわば主役である。

もう一つの項目は「御詰」とあつて、その文字の片付き上方に小さく平仮名で「むかし」あるいは「揃」「別儀」などと付記されることがよくある。これも茶銘の一種だが、袋茶の銘以外の碾茶銘で、品質的には劣るとされる代物である。この量目の単位は斤であらわされる。江戸時代における葉茶の一斤は、二〇〇匁（七五〇g）と換算したとする考え方もあるが、今日通常は一六〇匁（六〇〇g）とする。むすびには「以上」または「已上」と書くことが多いが、記さない場合もある。日付は干支と月日、そして詰主の名前と花押で締めくくられる。

壺の中は「極上」の袋茶とともに、「御詰」と称する葉茶でもつて満たされ、内箱に入れられ、その蓋の内側に右の文書が添付される。このように理解されている。

ここで取り上げる入日記（II）の三通は、上林道庵が作成したもので、その一つは「亥閏五月」とあるのでおのずと天和三年（一六八三）、ほかの二通も前年とそのまた前年、天和二年（一六八二）と改元前の延宝九年（一六八一）となる。詰主は右の記録に登場する上林道庵と同一人物で、納入先である花山院大納言は花山院定誠（一六四〇～一七〇四）とわかる。「六月には実際に茶を詰めることはしない」と決め付けた直後である。別の注文主ではあるが、ちゃんと五月や六月の日付でもつて、茶の目録とされるものがこつている。

通常、入日記はこのような日付でもつて、内箱の蓋裏に順に張り重ねられることが多い。この場合もそうであ

る。ごていねいに外箱まであるだが、肝心の茶壺がない。ただ箱の大きさからして壺の大きさは、確実に一般的な茶事に用いるサイズ、高さも幅も三十cmあまりのはずである。注意したいのは、そうした壺に入れたとされる茶の量である。

三通はいずれも「極上」の半袋が十袋つまり二七五g、ここには袋茶以外の「極上」も付け加えられていて、それが半斤ないしは小半斤、つまり二〇〇、三〇〇g、そして壺に直に入れるといわれる「詰」が二、六斤または四、三斤つまり二kg前後である。確実に言えるのは、これらを合わせた量目は該当する茶壺にはとうてい入りきらないということである。

入日記は、ほとんどの場合、文字通りの目録ではないことがわかってきてている。茶を詰めた日付だけでなく、茶を摘んだ時期まで記すものもあるが、量目も含めて、それらはおおむね事実とは異なるのが通例である。作為的に事実とは距離をおいて作成され、同時にそれでもつて通用した特異な文書とみなすほかないのである。入日記は、実態を反映しないのが常である。

また本願寺の史料にもどるが、「茶を詰めることなどありえない」と言つたその時期に、門主の茶壺に動きのあつたことを示す記事が次から次へとあらわれる (IV)。

本願寺事務方の職掌については詳しくないが、はじめ上原兵庫なる人が茶壺の担当だつたものが、退職後は藤田玄蕃に引き継がれて (IV-⑤)、さらに横田内膳 (IV-⑦) が後任者の一人だつたことがわかる。壺は「初雪」

の愛称をもつものをはじめ六つがみえる (IV-①) が、これらに茶を詰める役割を上林道庵が独占するのではない。あくまでも上林一門の筆頭である峯順を先頭に挙げ、自らは二番手に控え、さらにほぼ同等の立場にある堀真朔を加え、三家でもつて本願寺の御用をまつとうするかたちをとつてている。実質は、上林道庵が主たる出入茶師であつて、それを堀が助勢する役割を担つていたことは、本願寺に実際に顔を出す機会の多さや内容からして明らかである。でも、公式に茶詰をするとなると、江戸幕府御用茶師の代表者である上林峯順を先頭に据えるのである。ちなみに、碾茶の受注については、複数の茶師でもつて注文を受けさばくというのが宇治での通例になつてゐる。しかも茶師間のみならず宇治茶業界全体でもつて先様の注文に確実に対応できる体制が整つていた。宇治郷の茶業家たちが相談・融通しあつて、調達・調整する会詰または合詰という仕組が背後にあつた。

今回もつとも興味ふかく考えさせられたのが、これらの中を預けるとされる第三者機関についてである。本願寺の壺を預けるとされる第三者機関についてである。本願寺の壺に関与する長床坊は、愛宕山の坊院の一つで、ほかに知られたものでは福寿院と教学坊、それと大善院がある。茶壺を愛宕に預ける、あるいは「壺を上げる」といつて、夏の暑さによる茶の傷みを和らげるために茶壺を毎年愛宕山の茶壺蔵で保管する、それが通例であつたとよくいわれてきた。その実務をこうした坊院が担つただろうと推測されてきたわけだが、右のようなこと、つ

まり宇治から夏場に大量に茶が出て行くことは、茶を扱う者からするとその時期に茶を壺に詰める行為と同様、これまた常識的にはありえないことである。しかもそれが京都の街中を貫けて、あの愛宕の山上に持つて上がられるなど、もってのほかである。茶をわざと傷めているとしかいいようがないし、あまりにリスクが高い。

けれども、愛宕長床坊の茶壺への関与は明らかである。文献の上でこれほど明確な記事がどうえられたのは、たぶん本願寺の場合が初めてのことだろう。毎年五月ないしは六月に愛宕に壺がもつていかれて、保管の礼である金品が渡され、まさに茶壺の保管が愛宕山でなされていたことの証明になりそうな記事に映るのだが、文字通りには受け取れない。九月の末に長床坊に預けた壺を取りに行くという記事もある(IV-18)が、厳密に言えば、ここに茶そのものは登場しない。

さきに触れたように茶壺の入日記は独特の記載がなされるもので、茶壺の管理に愛宕山が関与したというのは事実であるが、これはおそらく碾茶そのものは介在しない、茶壺をめぐるいわばセレモニーだったと思われる。すなわち、入日記はこれだけ注文をしました、受けましたという証明書的な役割があつて、実はそのことこそが重要だつたのではなかろうか。いち早く摘まれたものが上質だという通念があつて、摘採の日付もさかのぼつて記すこととし、かつ注文をうけるのは製茶の季節が終わつた直後という設定で、五月ないしは六月ということに

する。その時点で一定量の葉茶が確保されたことを証明するのが、入日記の主たる目的であり、箱裏への添付はその壺の経歴と威儀を示すパフォーマンスであつた。

愛宕は、そうした契約を保証する機関で、おそらく近世(江戸幕府成立)以前から天皇や公家をはじめ京都で政務と文化の中核にある諸家の茶壺に関して、こうした形式とまつたく同様だったかどうかはわからないが、独占の権利・権益をもつて宇治とのあいだで機能していたのではないだろうか。夏切壺以外の葉茶は、たぶん口切まで宇治で保管されたのだと思う。それがもつとも安全で、確実で、かつもつとも良質な茶に出会える方法のはずである。

右のような慣習を、注文主の側の誰もが義務的に履行しなければならなかつたかといえば、必ずしもそうではなかつただろう。ほかにルートや手立てはあつただろうが、茶を宇治に発注して、それが確実に請け負われ、かつ安全に保管され、口切時にはスムーズに納品されるという保証を入日記と愛宕がになつた。こうした方式が一部では確実に継承されていたと思われる。こうした独特的慣習が廃れるとともに、曲解・歪曲され、「愛宕山中で茶壺が夏を越した」という実態からは遠く離れた俗説に拡大されてしまつたのではなかろうか。ただ、そのような風説が広く流布するほど、愛宕山の各坊院は茶壺でもつて知られていたし、信用を得ていたことも事実だつたのだろう。

ここで本願寺の壺が愛宕長床坊とのあいだを往復する記事が何度も登場するが、この距離は本願寺と愛宕山間ではないと思う。愛宕の各坊院は市中に里坊をもつていた。長床坊の場合だと、新町通りの武者小路を下がった西側の奥まつたところ（ちょうど聖ヨゼフ教会があるところ）であり、そことの往復をさすものと思われる。さらに言うと、本願寺と愛宕、そしてそこに宇治を含めた間で、茶壺が実際に行き来したと受け取れるが、これも形式だから、そこでは通の壺つまり代用品が用いられたと思う。本願寺の場合「初雪」といった銘をもつ壺やルソン壺は、門主や管理者の手元を離ることはまずなかつたはずである。

元禄十年、事務官の交代からまもなく、本願寺から発注される茶壺の注文数が半減している（IV-⑤）。またさきほど示した茶壺を長床坊へ取りに行く記事を最後に、長床坊関係の記述が見えなくなる。茶壺関連の記事が記録する項目の対象から除外された可能性もあるが、長床坊を仲介とする行事は、必要不可欠な制度（しきたり）ではない。掛かる費用はいわば保険料（しかも掛け捨て）だから、たとえば両者をつなぎとめていた人間関係が断たれたりすると、簡略化がすすみ、それ 자체が消滅されることが考えられる。おおむねそうした経過をたどつたのではなかろうか。

本願寺門主の茶に関する事実から、実際に飲用に供された茶についての鮮明な姿は抽出できなかつたが、茶壺

に関わる伝統と型を重視した儀礼的性格の一端をうかがい知ることはできたようだ。

### 〈史料〉

I、「寛文十二王子稔日次之記」（長御殿日次記）

#### ①正月二日条

一巳刻半、円柿一箱上林道庵、扇子三本野間三竹、同三本入藤岡十兵衛、御茶筌三穂堀真朔、（中略）右何茂進物持参シ御礼伺公。

一午刻前、御礼ニ御成、野間三竹、角倉与左衛門、同市丞、上林道庵、雁金や次郎右衛門、於小広間ニ御礼申被上候、

#### ②四月十九日条

一午ノ刻過、御聞茶二種鱈一本、上林道庵より進上也

#### ③六月二十五日条

一卯ノ刻前、御茶詰宇治へ池永主税被遣候、例年帷子單物茶師へ被下候、宗有御断ニ付宗古昨日より宇治ニ逗留仕候

#### ④閏六月十九日条

一同（午）刻、御茶師上林道庵夏切壺一、同道悦糟漬鮑壺桶、同源太郎塙引壺右何茂持參

#### ⑤閏六月二十八日条

一同（辰）刻半、御所勞為御見舞、さきけ壺折上林道庵進上也

一同（辰）刻半、御所勞為御見舞、上林春悦伺公素麵一  
箱進上也

⑥九月十五日条

一丑ノ刻過、北野觀世太夫勧進能御見物御成御供衆御伽衆御棧敷へ御見舞衆・御伽衆・上林道庵…

II、「花山院大納言様御茶入日記」

花山院大納言様

御茶入日記

一極上

初雪

半拾

内

二 柳 花 嵐

白木綿

をしほ

半斤

はやつミむかし

一極上

別儀揃むかし

一御詰

西五月吉日

上林道庵（花押）

花山院大納言様

一極上

一

御茶入日記

二

二

花

嵐

をしほ

一

柳

白木綿

半拾

白むかし

一極上

別儀揃むかし

一御詰

戌六月吉日

上林道庵（花押）

半斤

四斤三

初雪

一極上

二

花

嵐

をしほ

一

柳

白木綿

半拾

花山院大納言様

御茶入日記

一極上

一

花

嵐

をしほ

一

柳

白木綿

半拾

はやつミむかし

一極上

一

柳

白木綿

半斤

白むかし

一極上

一

花

嵐

をしほ

一

柳

白木綿

半拾





閏五月廿一日

上原兵庫判

長床坊様御同宿中

一初雪  
（上林）峯順一火口呂宋  
（上林）道庵

## 中奉書立目錄

單物帷子五 内單物式帷子三 長床坊へ

## 小奉書立目錄

青銅百五十疋 壺奉行三人へ

## ⑤元禄十年

尚々上原兵庫儀隱居被申付候、拙者儀跡役相勤候  
条、已後御心安可貴意大慶存候以上

未得御意候得共、一筆致啓達候、弥御勇健可被成御座目  
出度奉存候、然者本御門主壺取二遣申候間、書付之通神尾覺右衛

栗津杢右衛門・土橋平兵衛此兩人江御渡シ可被下候、尚期後音之時  
期後音之時候、恐惶謹言

四月十一日

藤田玄蕃

長床坊様御同宿中

一筆致啓達候、先以弥御勇健可被成御座与目出度奉存候、  
然者本御門主茶壺取二遣之候間、覚書之通小室政右衛門  
栗津杢右衛門此兩人江御渡シ可被下候、仍而目錄之通  
被遣之候、尚期後音之時候、恐惶謹言

九月十五日

藤田玄蕃

長床坊様御同宿中

覚

一初雪  
（上林）峯順一火口呂宋  
（上林）道庵

右之通此度下り申候、以上

九月十五日

## ⑥元禄十一年

一筆致啓上候、先以弥御勇健可被成御座候、目出度奉存  
候、然者本御門主茶壺取二遣候間、書付之通神尾覺右衛  
門・土橋平兵衛此兩人江御渡シ可被下候、尚期後音之時  
候、恐惶謹言

五月十日

長床坊様御同宿中

玄蕃

一筆致啓達候、先以弥御勇健二可被成御座目出度奉存候、  
然者本御門主茶壺取二遣候間、覚書之通中村次郎左衛門  
栗津杢右衛門此兩人江御渡シ可被下候、仍而目錄之通  
被遣之候、尚期後音之時候、恐惶謹言

九月十五日

藤田玄蕃

長床坊様御同宿中

（上林）峯順

（上林）道庵

覚

一初雪  
（上林）峯順一火口呂宋  
（上林）道庵

長床坊様御同宿中

一初雪  
（上林）峯順一火口呂宋  
（上林）道庵

覚

一初雪  
（上林）峯順一火口呂宋  
（上林）道庵

覚

一初雪  
（上林）峯順一火口呂宋  
（上林）道庵

覚

真壺  
已上

(堀)

真作

一御殿江御館入之儀者私先祖ノ代々御茶御用被為仰付有

難仕合奉存候、御代々様奉蒙御尊命、別而証如様御代不被為相替奉蒙御懇命、其上於御前御文章御直拝領仕

只今二所、持仕罷在候、顯如様御代格別奉蒙御懇命、

大坂表江も度々罷出奉窺御機嫌候、紀州鷲之森江御引

移被為遊候節御供仕罷出、當御殿江御引移之御供仕不被為相替奉蒙御懇命御用相勤罷在候、良如様御代二者

一筆致啓上候、暑氣之時分弥御堅勝可被成御座与珍重奉

存候、然者本門主御茶壺、如例年被差登候間、宜憑存候、

依之目錄之通被遣候、委曲中山市之進口上ニ可被申述候、恐惶謹言

六月十四日

横田内膳在判

長床坊様人々御中

⑧享保六年

一筆致啓達候、弥御堅勝可被成御座与珍重奉存候、然者本門主御茶壺、取ニ被遣候間、覚書之通村井勘平江御渡シ可被下候、仍而目錄之通被遣之候、尚期後音之時候、恐惶謹言

九月廿二日

横田内膳判

長床坊様人々御中

(長床坊へ壺を預けたり取りに行つたりする記事は、これ以降見えなくなる)

V、「上林道庵由緒書」

一禁裏御所江関東ノ御進献之御茶を初貢物与唱、別而格別之御由緒御座候義、御茶師仲ケ間之者共、其外諸家御茶御進献之御家者当御殿様近衛殿、此御両方様計二位御調進之御例之相残り御座候申伝罷在候、右初貢之

限り申候至而重キ御事ニ御座候、御殿様御進献者御即

御茶者古來乍恐私手製之初雪御座候、此儀者重々有難御事ニ而、誠ニ私一家之規模ニ而冥加もなき御儀御座候、右御用も不相替被為仰付、其外御茶御用相勤來り候儀一通り御館入之衆中与者事替り、誠ニ御家中御同前ニ御殿様之御陰ヲ以数代相続仕候義ニ御座候、右之通以前も書上候写御座候ニ付、此度も猶又奉差上候、以上

天保拾三寅年

正月

上林道庵

## 参考

「宇治茶師名前并茶銘」(宝暦十二年写本 宇治市歴史資料館蔵)

初雪

曙

祝初白

花柳嵐

小塩

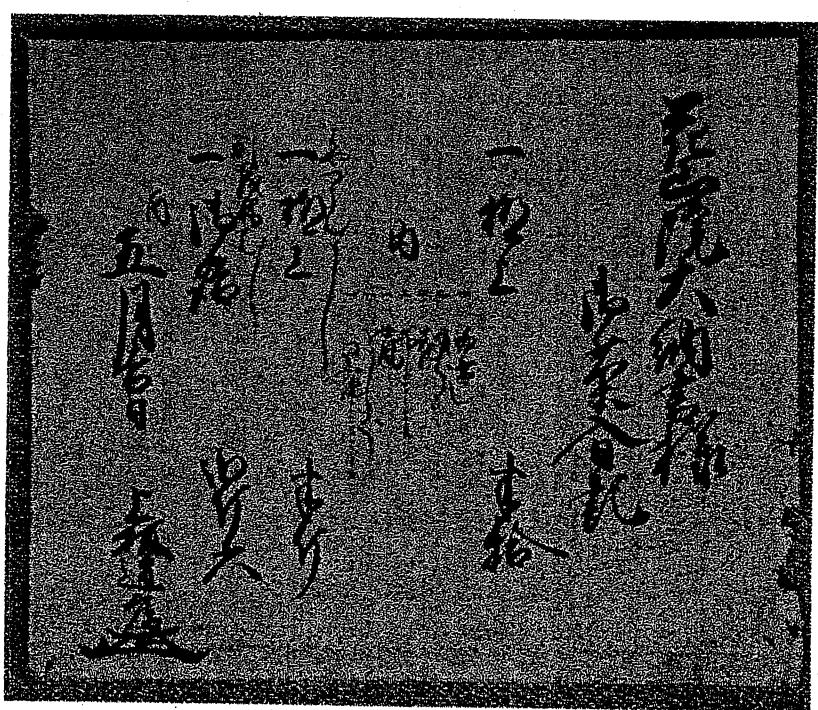
白木綿

べ九種

上林道庵

(宇治市歴史資料館学芸員)

## 花山院大納言様御茶入日記



## &lt;編集後記&gt;

新年度から本願寺宗務所の寺務体制が更改され、本願寺史料研究所の位置づけも変わります。研究所の行く末に不安がよぎりますが、今はすべてを飲み込んで、四月以降の模様眺めです。

今回は坂本さんに、いつもとは違う、本願寺の史料の顔を見せていただきました(左)